感染症発生動向調査委員会報告　7月

≪今月のトピックス≫

- **手足口病が横浜市内で大流行しています。**
- **ヘルパンギーナが港北区、緑区、青葉区、都筑区、瀬谷区で警報レベルです。**
- **流行性耳下腺炎が緑区、泉区で注意報レベルです。**
- **咽頭結膜熱が磯子区、緑区で、伝染性紅斑が栄区で警報レベルとなっていますが、市全体の流行は下降傾向です。**

全数把握疾患

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

6件（O157VT2が4件、O26VT1VT2が1件、O157VT不明が1件）の報告がありました。家族内接触感染が3例、認められました（1例は6月報告例の家族内二次感染）。特定の飲食店等での集団感染はありませんでした。6月の報告数12件より減少しましたが、例年夏季に感染者数のピークを迎えるので8月も引き続き注意が必要です。8月は食品衛生月間です。腸管出血性大腸菌感染症も含めた食中毒に注意しましょう。家庭でできる一般的な食中毒の予防法の6つのポイント（①新鮮な食材の購入　②冷蔵・冷凍での食材保存　③手洗いの励行、清潔な調理　④肉・魚の十分な加熱　⑤食事前の手洗いと調理後はすぐに食べる　⑥清潔な容器で保存し温め直すときは十分に加熱、長時間過ぎたものは捨てる）を心がけましょう。

＜レジオネラ症＞

肺炎型1件の報告がありました。感染経路は不明です。

＜アメーバ赤痢＞

腸管アメーバ症7件の報告がありました。4件は日本国内での感染（性的接触2件、経口感染1件、感染経路不明1件）が推定されています。1件はインドネシアでの経口感染、他の2件は感染経路・感染地域ともに不明でした。

＜後天性免疫不全症候群＞

3件の報告がありました。1件は無症候期（異性間性的接触：日本国内での感染）、もう2件はAIDS（どちらも異性間性的接触で、1件は国内又はフィリピンでの感染、もう1件は国内での感染）でした。

＜風しん＞

2件の報告がありました。どちらも予防接種歴なし。内1件は麻しんPCR検査を実施したところ陰性であり、風しんIgM1.99のため、風しんと診断されました。横浜市の4～7月の報告件数は計12件で、昨年の報告総数3件をすでに上回っています。東京都、川崎市等近隣地域での流行は見られません。風しんは、麻しんと非常によく似た症状を呈する場合があります。

＜麻しん＞

4ヶ月児の1件の報告がありました。臨床診断例で、国内での感染が推定されています。ワクチン接種歴はありません。麻しん排除に向けて、積極的な疫学調査や検査が求められています。麻しんを疑った際には最寄の福祉保健センターにご相談ください。

※各感染症については、横浜市衛生研究所HPをご参考ください。
http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/

定点把握疾患

平成23年6月20日から7月24日まで（平成23年第25週から第29週まで。ただし、性感染症については平成23年6月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成23年	週－月日対照表
第25週	6月20日～26日
第26週	6月27日～7月3日
第27週	7月4日～10日
第28週	7月11日～17日
第29週	7月18日～24日

1 患者定点からの情報

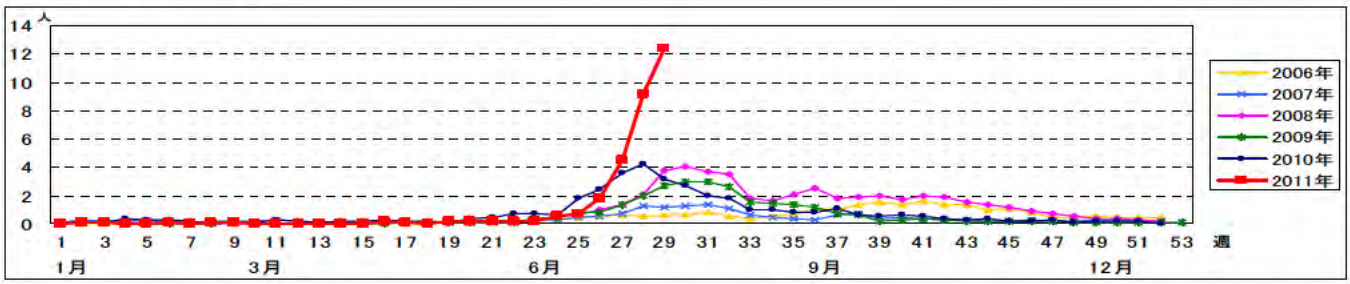
市内の患者定点は、小児科定点:92か所、内科定点:60か所、眼科定点:19か所、性感染症定点:27か所、基幹（病院）定点:3か所の計201か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計152定点から報告されます。

＜咽頭結膜熱＞

第29週では、磯子区で定点当り5.75と、警報レベルを上回り、9週間警報レベルが持続しています。緑区で3.00と5週警報レベルが持続しています。市全体では0.90と、流行は下降気味です。

＜手足口病＞

6月から西日本で流行していましたが、徐々に横浜市内でも流行が始まり、第29週では横浜市全体で定点あたり12.38と、1995年以来16年ぶりの大流行となっています。14区で警報レベルとなっており、特に緑区では42.60と多くなっています。第29週では、県域（横浜、川崎、相模原市除く）4.25、川崎市15.34、東京都9.53となっています。

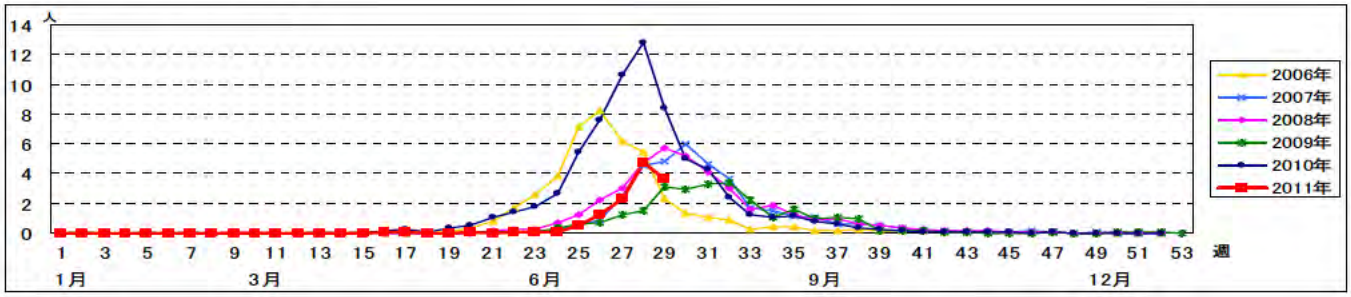


なお、手足口病の原因ウイルスは、CA16やEV71が一般的ですが、今年の流行ではCA6が数多く検出されており、横浜市でも病原体定点からCA6が検出されています。静岡県の報告[1]によると、今年CA6が検出された手足口病では、発熱率が高く、四肢や臀部に紅暈（こううん）を伴う水疱性病変が出現するが、手掌や足底にはむしろ少なく、上腕、大腿部および臀部に高頻度に認める。また、口囲や頸部周辺にも皮疹を認める、などといった特徴が報告されています。また、大阪府では家族内感染が疑われる成人の手足口病患者が報告されています[2]。（詳しくは下記ホームページをご参照ください。）感染経路は飛沫感染、接触感染、糞口感染であり、乳幼児への感染予防は手洗いの励行と排泄物の適正な処理が基本です。

1)IASR＜速報＞2011 年のコクサッキーウイルス A6 型感染による手足口病の臨床的特徴—静岡県 http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3784.html
2)IASR＜速報＞コクサッキーウイルス A6 型による手足口病の成人例—大阪府 http://idsc.nih.go.jp/iasr/rapid/pr3786.html
参考：衛生研究所 H.P.手足口病について http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/disease/handfoot2.html
参考：衛生研究所 H.P.手足口病 臨時情報 http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/idsc/rinji/hfmd/hfmd201128w.pdf
参考：衛生研究所 H.P.手足口病 市民向けパンフレット http://www.city.yokohama.lg.jp/kenko/eiken/punf/pdf/hfmd201107.pdf

＜伝染性紅斑＞
　第29週では、栄区1.25で、10週警報レベルが持続していますが、横浜市全体は0.30で流行は終息に向かっています。

＜ヘルパンギーナ＞
　第29週では、港北区5.38、緑区6.20、青葉区10.00、都筑区7.33、瀬谷区10.00と5区で警報レベルとなっていますが、横浜市全体では、第28週4.74→第29週3.71と、やや減少傾向を示しています。夏季に流行するため、引き続き注意が必要です。第29週では、県域（横浜、川崎、相模原市除く）4.11、川崎市5.84、東京都6.85となっています。

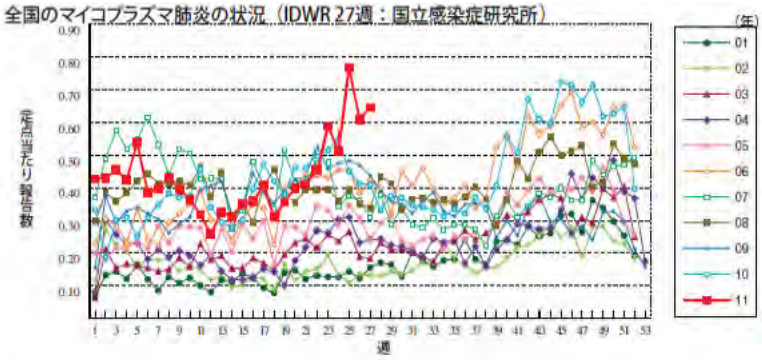


＜流行性耳下腺炎＞
　緑区4.00、泉区4.33と注意報レベルになっています。横浜市全体でも第28週0.52→第29週1.16とやや増加傾向にあり、今後の注意が必要です。

＜急性出血性結膜炎＞
　南区で3.00と警報レベルになっています。

＜性感染症＞
　6月では、性器クラミジア感染症は男性が35件、女性が17件でした。性器ヘルペス感染症は男性が8件、女性が13件です。尖圭コンジローマは男性11件、女性が7件でした。淋菌感染症は男性が15件、女性が2件でした。

＜基幹定点週報＞
　マイコプラズマ肺炎が全国的に第 24 週あたりから増加傾向にあり、注意が必要です。横浜市でも第 22 週から 28 週まで週 1～2 件ずつ報告されています。
6 月は細菌性髄膜炎、無菌性髄膜炎、クラミジア肺炎の報告はありませんでした。



＜基幹定点月報＞
　6月は、メチシリン耐性ブドウ球菌感染症11件、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告はありませんでした。

【　感染症・疫学情報課　】

2 病原体定点からの情報

市内の病原体定点は、小児科定点:9か所、インフルエンザ(内科)定点:3か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所の計16か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点とインフルエンザ定点では定期的に行っており、小児科定点は9か所を2グループに分けて毎週1グループで実施しています。また、インフルエンザ定点では特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。

眼科と基幹定点では、検体採取は対象疾患の患者から検体を採取できたときにのみ行っています。

＜ウイルス検査＞

7月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点40件(鼻咽頭ぬぐい液40件)、基幹定点22件(鼻咽頭ぬぐい液11件、ふん便5件、髄液6件)、眼科定点6件(眼脂6件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は手足口病14人、上気道炎12人、下気道炎7人、ヘルパンギーナ3人、発疹症3人、咽頭結膜熱1人、眼科定点は流行性角結膜炎5人、急性結膜炎1人、基幹定点は発疹症4人(5検体)、敗血症3人(7検体)、熱性けいれん3人(4検体)、上気道炎3人、発熱2人、手足口病1人でした。

8月9日現在、小児科定点の上気道炎患者5人と咽頭結膜熱患者1人からアデノウイルス(型未同定)、上気道炎患者1人からコクサッキーウイルス(Cox)B1型、手足口病患者1人からCoxA16型、眼科定点の流行性角結膜炎患者2人からアデノウイルス(型未同定)が分離されています。

これ以外に遺伝子検査では、小児科定点の手足口病患者6人とヘルパンギーナ患者2人からCoxA6型、手足口病患者1人と下気道炎患者1人からCoxA10型、発疹症患者2人からヒトパレコウイルス3型、手足口病患者1人からCoxA16型、上気道炎患者1人からアデノウイルス5型、基幹定点の発疹症患者3人、敗血症患者2人と発熱患者1人からヒトパレコウイルス3型、敗血症患者1人からアデノウイルス2型、熱性けいれん患者1人からアデノウイルス3型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

【 検査研究課 ウイルス担当 】

＜細菌検査＞

7月の感染性胃腸炎関係の受付は小児科定点からの検体はなく、 基幹定点から菌株受付が4件、定点以外の医療機関等からは6件あり、赤痢菌、腸管出血性大腸菌、サルモネラが検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は小児科定点から7件で、A群溶血性レンサ球菌(血清型はT3、TB3264)、インフルエンザ菌が検出されました。定点以外の医療機関等からは9件で、B群溶血性レンサ球菌(血清型はNT6)、レジオネラ(1群、6群)が検出されました。

表　感染症発生動向調査における病原体検査(7月)

感染性胃腸炎

検査年月	7月			2011年1月～7月		
定点の区別	小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
件数	0	4	6	2	72	38
菌種名						
赤痢菌		1			3	2
腸管病原性大腸菌					3	
腸管出血性大腸菌			5			22
腸管毒素原性大腸菌					2	
パラチフスA菌					3	
サルモネラ			1		15	4
カンピロバクター						3
黄色ブドウ球菌					1	1
コレラ菌						1
クロストリジウム						1
不検出	0	3	0	2	45	4

その他の感染症

検査年月		7月			2011年1月～7月		
定点の区別		小児科	基幹	その他*	小児科	基幹	その他*
件数		7	2	9	51	6	33
菌種名							
A群溶血性レンサ球菌	T1				7		
	T3	1			4		
	T4				3		
	T12				8		
	T25				2		
	T28				4**		1
	T B3264	3			8		
	型別不能				2		
B群溶血性レンサ球菌				3			6
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌						4	
バンコマイシン耐性腸球菌							15
Achinomyces							1
Branhamella					1**		
Legionella pneumophila				3			6
インフルエンザ菌		2			6**		
肺炎球菌					4**		
不検出		1	2	3	8	2	4

＊:定点以外医療機関等(届出疾病の検査依頼)

＊＊:同一検体から複数菌検出

T(T型別):A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

【　検査研究課　細菌担当　】